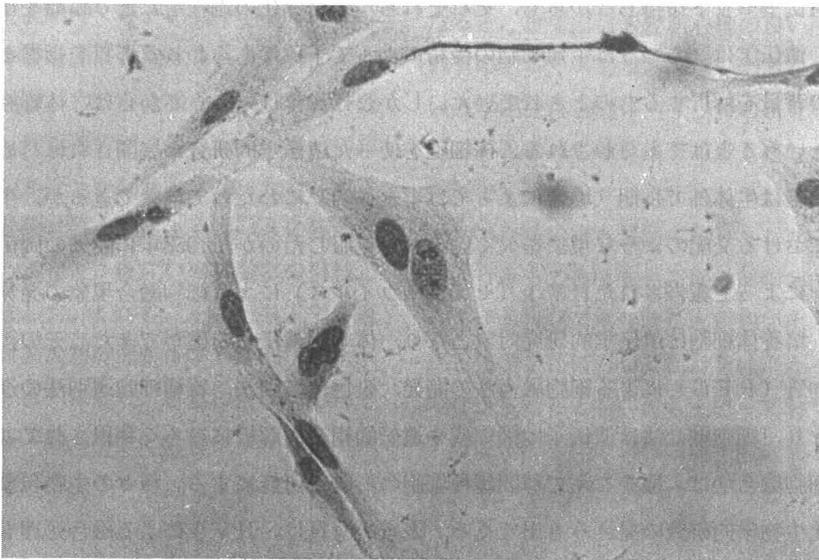


廣報

東京大学理学部



目次

表紙の説明	1
退官にあたって	鈴木秀次…2
鈴木先生を送る	二宮敏行…2
“台湾小低気圧”と東京の大雪	岸保勘三郎…3
岸保さんの思い出	松野太郎…4
どん底から	田丸謙二…5
田丸先生の御退官によせて	内藤周弑…6
大学を去るにあたって	花井哲郎…7
生物学的古生物学の事始め	鎮西清高…7
結晶学の流れの中の鉱物学第2講座	竹内慶夫…8
竹内慶夫先生と鉱物学	武田弘…9
前川文夫先生を追憶して	古谷雅樹…11
高橋一郎さんを偲んで	田上多佳子…12
<学部消息>	13

表紙の説明

多細胞生物では、生殖細胞の受精を出発点とする個体発生過程の初期に、遺伝的永続性をなす生殖細胞と、個体をかたちづくる体細胞とがわかれる。体細胞はどれも完全遺伝子セットを持ちながらも、それぞれちがった分化の過程をたどり組織を構築する。遺伝学は、ふつうは生殖細胞の受精によって子孫にあらわれる形質を指標とし、その背景を解析するものとされていた。しかし1970年代に入ってから、体細胞遺伝学ということばであらわされる、体細胞を使った遺伝学的研究が展開されはじめた。体細胞は生体外で長期（場合によっては半永久的）にわたって培養できるが、生殖細胞における交配のような現象を欠く。これを克服したのが、1958年に阪大の岡田善雄博士によって報告されたH V J（センダイウイルス）による細胞融合現象の発見である。培養体細胞は遺伝学的研究対象となり、体細胞遺伝学の礎ができた。その後の化学物質（PEG）による細胞融合法の開発、染色体識別法、雑種細胞選別法の進歩等により、細胞融合法は遺伝子地図作成や遺伝的相補性解析にひろく利用されている。

細胞融合法は、種をこえて種間雑種細胞の形成を可能にする。種々の生物現象の、進化生物学的研究の見込みも出てくる。表紙の写真は、H V Jによる融合処理をしたヒト培養細胞（X P 20 S）とサカナ培養細胞（R B C F - 1）を一晩培養した結果の一部を示す。中央にヒト（大型の核）・サカナ（小型の核；DNA量にして前者は後者の約3倍）異種融合細胞がある。他に未融合細胞、同種融合細胞もある。これらの混合細胞集団からヒト・サカナ雑種細胞のみをクローンとして選別するには、相方の細胞にたとえば薬剤耐性という適当な目印をつけ、選択培地での培養を続ける。得られた雑種細胞の子孫を、目的とする研究（私の場合はDNA修復や恒温性・変温性等）に用いる。

動物学教室 嶋 昭 紘

退官にあたって

鈴木秀次(物理)

理学部に来てからすでに21年になりました。当初は「原子力関係講座」の一つであった放射線物性学の担当でしたので、東大の原子力教育研究体制の構想と実態の食違いに悩まされました。ときどき「原子力講座は預かり講座」という言葉が教授会でも出て、理学部の正式なメンバーとして認められているのかどうか疑わしくなったり、原子力関係講座の建物は弥生地区キャンパスに建つはずであるということで、仮住いの実験室の引越しが続いたりしました。しかし、そのうち工学部附属の原子力教育施設管理部が全学共同利用の原子力研究総合センターに変わり、さらにしばらくして原子力関連講座、協力講座の名称がなくなり、原

子力講座の建物の要求が取り止めになりました。

普通の学部所属の講座として取扱われるようになると、理学部は大変居心地の良い所です。物理教室の数多くの先輩、同僚の刺激を受けながら若い大学院生達と固体ヘリウムの研究を進めることができたのは、私にとって最も嬉しかったことの一つです。

私の停年退官も目前になりました。この21年間をふり返ってみますと、理学部のいろいろな方から大変お世話になったことが思い出され、それに比して理学部に対して私自身はほとんどなすことのなかったことを心苦しく思っております。

最後に理学部の皆様の益々の御発展を祈ります。

鈴木先生を送る

二宮敏行(物理)

鈴木秀次先生は、本年3月停年退官されることになりました。髪の毛はうすくても、まだまだお若い姿を見ると、還暦というはるか昔につくられた習慣が今に生きているのが奇妙に感じられます。

鈴木先生は、昭和20年北海道帝國大学を御卒業になり、東北大学金属材料研究所、日本原子力研究所と南下して、昭和38年本学に移って来られました。先生は、我が国における格子欠陥研究の草分けの一人で、その独創性豊かな御研究のゆえに、常に、世界のこの方面の研究に指導的立場を果されました。転位と不純物原子の化学的相互作用(鈴木効果)の提唱、固溶体硬化の解明、転位

のパイエルス力に対する格子構造の役割の発見などは世界的に良く知られ、これらの貢献に対し、松永賞、日本金属学会功績賞を受賞されました。また、低温センター長、J J A P (応用物理学英文誌)編集委員長として、学内外で活躍されました。

開拓的な研究の中では、楽しい思い出とともに、いろいろ悩むことも多かったと思いますが、先生の最大の悩みは鈴木秀次という名前にあったのではないのでしょうか。H. Suzuki という宛書きは、人を特定するのにあまり役に立ちません。理学部だけでも、鈴木尚名誉教授、鈴木秀夫教授、鈴木

秀穂助教がおられます。identification については、外国人も大いに悩んだようで、先生にあるアメリカ人がつけた名前は Happy Suzuki であったと伺っております。あだ名の由来は、鈴木先生を直接御存知の方は直ちにお分りと思いますが、

いつもにこにこしておられることにあるようですが、もちろん、敬愛の念の表われでしょう。

先生は、今も、固体ヘリウム中の格子欠陥などの新しい問題に、情熱的に取り組んでおられます。Happy Suzuki であられることをお祈りします。

“台湾小低気圧”と東京の大雪

岸 保 勘三郎 (地球物理)

昭和45年4月に気象庁電子計算室から当理学部に移り、少し机の前でぼんやりと考えごとをしようと思っていたところ、早速これまで全国の大学関係者で計画されていた東支那海における“気団変質観測実験”の計画を手伝って欲しいといわれ、雑用の渦にまきこまれてしまった。

“気団変質観測実験”の計画の中には“台湾小低気圧”の発生を解明することが主目標のひとつとしてあげられ、観測は1月もしくは2月に予定されていた。この“台湾小低気圧”は冬1月、2月頃に台湾の北に発生し、1日後には関東南岸まで東進し、東京に大雪をもたらすこともある、アジア特有の気象擾乱である。実際の観測は昭和49年と50年の2月上旬に、2回にわたり10日間沖縄を中心にして東支那海海域でおこなわれた。カナダ、アメリカ、オーストラリアの研究者も参加した観測であったが、残念ながら、この両年の観測期間中に、“台湾小低気圧”の発生はなかった。その代りに、冬の暖かい東支那海の海面上で発生する小さな対流渦、シベリヤからの寒波の吹き出しによる済州島(朝鮮)からのカルマン渦の発生、海面から1キロメートルまでの大気境界層での乱流混合など、今までよくわからなかったことが観測面でいろいろと明らかにされた。この時アメリカの大気科学研究センター(NCAR)から観測に参加した“ELECTRA”という気象観測機の

すばらしさには目をみはった。(ちなみに日本には現在でも研究用の専用気象観測機は1機もない現状である。)“ELECTRA”は海面上わずか10メートル、50メートルといった高度を自由自在に低空飛行し、東支那海一帯での海面附近の乱流観測をおこなった。またその時みた沖縄の米軍基地の広大さ、その基地内にある米軍の気象隊の規模の大きさなどにも驚き、改めて沖縄の軍事基地としての役割をみせつけられた思いがした。

退官の際の思い出として、研究の話ではなく、今から10年前の沖縄での観測の話を持ち出したが、私にとっては在職中の一番思い出の多い観測であったからである。ひとつはその頃私自身“台湾小低気圧”の発生についての数値シミュレーションをおこなっていたこと、もうひとつはデスク・ワーク中心の私にとって、このような大規模な気象観測ははじめての経験であったからである。机の前ではよくわからない、自然の振舞いの一端をはじめてみせつけられたような気がしたものである。

観測後10年の月日が経過したが、今では“台湾小低気圧”の発生、発生後関東南岸への東進という大まかな大気擾乱の変動を、数値予報の手法で2~3日前に予測できるようになった。この背景には電子計算機の急速な進歩があったこと、また大気の運動の取扱いで学問的には大変進歩したこ

とがあげられる。といっても、降雨量、降雪量の定量的予報については今後の問題として残されているが、……。さる1月19日は東京は“台湾小低気圧”による大雪に見舞われたが、それにしても10年前には“台湾小低気圧”については未知の部分が沢山あったことを思い出し、つくづく時代と共

に学問は進歩するものであるということを痛感している。

最後に理学部の先生方、職員のみなさんには大変お世話になったことを改めて思い出し、感謝の意を表しつつこの駄文を閉じたい。

岸保さんの思い出

松野 太郎 (地球物理)

岸保さんの存在をはじめて知ったのは私が学部学生の時である。当時、岸保さんは地球物理の助手であったが、気象庁関係を含めた若手気象研究者のつくる「数値予報グループ」の中心的指導者として既に有名人であった。旧来の勘と経験に頼る天気予報に代えて、流体力学方程式の数値解による天気予報を日本でも実現しようという運動のリーダーだったのである。1950年代の初め、温帯低気圧の発達に関する理論で世界の気象学界にデビューした岸保さんは、その頃電子計算機(ENIAC)と共にプリンストンに生まれた数値予報プロジェクトに参加し、その成果を日本に持帰られたのであった。余談ながら、日本人で最初に電子計算機を使った人は岸保さんであると思う。

あいにく私が大学院に入るのと入れかわりに岸保さんは気象研究所に移られ、直接教えを受けることは出来なかった。長年の運動が実を結んで、気象庁としては大英断の、当時世界最大の電子計算機であるIBM 704の導入が決定し、岸保さんは数値予報実行の準備にあたられることになった。その後間もなく、現業体制として気象庁本庁に電子計算室が設けられ、再びそこに移られた。その頃の公務員給与体系のせいで、スカウトされる度に給料が下がったそうである。岸保さんの仕事にかける熱意と欲のない人柄を表す話として仲間うちに広く知れ渡った。

1959年すなわち今から四半世紀前の4月に電子計算機による予報天気図が初めて作られた。数値予報の実用化は世界で3番目であった。この前後の岸保さんの活動ぶりは物すごく、また颯爽としていた。新しい気象学と気象技術を学び、研究する人々の中心に存在する輝かしいスターであり、その言説の影響力はカリスマ的であったと言っても過言ではない。これに多少とも批判的だったのは、他ならぬ岸保さんの後輩達、すなわち東大地球物理の気象研に巣くう助手・大学院生で、私自身もその一人であった。私の研究の出発点は、この大スターの所説にとに角反対し、何とか誤謬を発見して先輩大学院生と一緒に溜飲を下げることであった。

十年余りの後、電子計算室から東大に戻られた岸保さんによばれて私は九大から東大に移った。偶然の事情もあって、気象研究室は教授・助教授とも入れ変わって再出発の形になった。私は教育と研究という大学内の仕事に打ちこめばよかったが、岸保さんはそれではすまなかった。次第に日本の気象学界全体の中心、まとめ役となることを周囲から期待されるようになり、ご自身もその責任を感じられてこの大役に取り組んでゆかれた。気象学は多くの対象を持ち、手法もさまざまであるが、日本の大学は、それぞれが特定の分野と手法を中心として大学間分業とでも呼ぶべき体制に

なっている。このような状況で、まとめ役を果たすのは容易ではない。最初に手がけられた協同観測計画AMTEXは、理論的研究を中心として来られた岸保さんには縁遠いものであった。岸保さんは、自己を主張することを控え、みんなの研究が伸びるようにと忍耐強く努力された。かつて「数値予報の旗手」だった時代に、それに反対する保守的な勢力に対して果敢な戦いを挑んで来られた事を知っていたので、私は岸保さんの変貌に驚き、その自己犠牲的努力に頭の下がる思いをした。一方、このような一面しか知らない最近の学生諸君

には、岸保さんの昔の姿を話しても納得がゆかぬ風である。

岸保さんが青春の情熱を傾けて実現された数値予報の精度が、この1～2年、急速に向上している。この冬は何度も大雪に見舞われたが、予報はパーフェクトであった。先日の大雪の前の夕刊では、観測時の天気図上に全く見えない低気圧の発生・発達が大型コンピュータの計算結果に出ていると解説していた。岸保さんは勝利の味をかみしめて第一線を離れてゆかれるに違いない。

ど ん 底 か ら

田 丸 謙 二 (化学)

私が当時の東京帝国大学を卒業したのは終戦後一年、ひどい時でした。インフレ、食糧難、住宅難、就職難……虚脱と絶望、それに少しばかりの解放感と希望がうずまいていた頃でした。教室には空襲で焼け出された職員、家族、学生達が寝泊りしていましたし、焼跡の防空壕の中に住んでいる人も少くありませんでした。食糧事情も底をつき、赤旗を押したて「米よこせ」運動が皇居におしよせたりしました。クラスの3人が結核で死んでいきました。通学の途中に通る品川駅では外地から引揚げて来た人々がホームに溢れていました。ザンギリ頭に煤けた顔をした女の人が唯茫然とホームに座り込んでいたのが印象的でした。多くの先輩達が、職がないままに続々復員して来ました。我々は卒業してもよい就職口などあろう筈がありません。といっても、とてもブラブラできる世の中でもない。財閥系の会社は賠償にあてられるという噂が流れていたし、景気のよい会社はヤミでサッカリンを作ったりしている街工場だったりして、一体どうしたらよいのか、とに角もぐりこめる所にもぐりこまねばという時代でした。正に「ど

ん底」の時代でした。

そのような時、大変幸運にも、戦時中に設けられた「特別研究生」の制度が残っていて、卒業と同時に、助手なみの給料を頂戴しながら、研究に専心することが出来ました。確か初任給が400円位、その後インフレを追いかけてぐんぐん上がって行きました。

その後横浜国立大学に赴任し、程なく米国のPrinceton 大学に留学することが出来ました。渡米して、見るもの聞くもの驚くことの多い時代でしたが、とても楽しく実り多い留学でした。横浜国大にいた拾数年の経験は、苦しい事も少くなかったとはいえ、それだけに今となってはとても貴重なものでした。東京大学に移ったのは今から20年余り前でしたが、初めての教授会で同じ「大学」といってもこんなにも違っているものかと強烈な cultural shock を受けたことを覚えています。それ以来、本当に長い間沢山のことを教えて頂きました。研究室でも百人近い才能に恵まれた人々と一緒に過ごすことが出来ました。すべて「楽しかった」以上の大きな幸せでした。

C'est le temps que tu as perdu pour ta rosa qui fait ta rosa si important. (君のばらを育てるために、君が多くの時間を失ったからこそ、君のばらは貴重なんだよ)。失ったのは時間だけではありませんでした。失うことはとりかえしのつかないことですが、しかしそれを失うことによって、失わなかったら到底わからなかったことを沢山教えられました。殊に私としてこの上なく幸せだったことは、これまで一緒だった

人々が、私にはもったいない位、よい人ばかりで、とてもよくして頂いたということです。研究室の人々、化学教室の人々、理学部の、さらには大学の人々に対して心から有難く感謝しています。このような恵まれた思い出を持ちながら、此所を去ることが出来る幸せを心の宝としてこれからも頑張っていきたいと思います。本当に有難うございました。

田丸先生の御退官によせて

内 藤 周 弑 (分光化学)

田丸謙二先生は昭和21年に本学理学部化学科を卒業後、横浜国立大学に勤められましたが、昭和38年に本学理学部化学教室に移られました。以来20年間化学反応学講座を担当され、特に固体表面での触媒反応の研究に幾多の顕著な業績をあげてこられました。先生が世界に先がけて提唱された「反応中の吸着量測定法」は、様々な表面解析手段の発展と相まって、ますますその応用範囲を広げようとしております。又、先生は教室主任・大学院主任・評議員、学部長、総長補佐など、行政面でも本学の運営に多大の貢献をされるとと

もに、日本化学会副会長を務められるなど、日本の化学のためにも尽力されました。

このように非常に忙しい身でありながら、一方で学生とテニスやサッカーを楽しまれる気さくさも先生の大きな魅力の一つであります。御退官後の先生は東京理科大学において教鞭をとられますが、さらにこの夏からは国際触媒学会の会長を務められることになっており、ますますの御活躍がうかがわれます。

御健康を心からお祈り申し上げます。

毎月 1 日は

「省エネルギー」

の日です。

大学を去るにあたって

花井哲郎(地質)

丁度戦争も終りに近く、東京の空襲ももう時間の問題となった頃、東大に入学した。安田講堂での入学式の総長のお話しは何も思い出せない。世の中は正義のために戦わねばならないと信じていたようだ。空襲で東京が火の海になるのを防ぐには、町家をこわして空地を作るしかなかった。私達学生は家の柱をのこぎりでひき、屋根の棟木をつなをつけて家を無我夢中で引きずり倒した。それでも東京は皆焼けてしまった。

終戦の詔勅は理学部二号館の地質学教室の用務員室で聞いた。ラジオにガァーガァーと雑音が入ってあまりはっきりとは聞きとれなかったがそれでも日本が降伏したことはわかった。一瞬の精神的に空白な時期をはさんで、世の中は急に左に旋回をはじめた。東京は焼け野原で食べ物もなかったのだから、人々は飢えて心は荒れはてていた。今度は戦前とはちがう正義が出て来た。食べ物をよこせと学生達はデモに出かけて行った。そして宮城前に駐車された進駐軍の自動車に次々と火をつけて焼いてさわいだ。警察に追われた学生は友達の家を頼りに逃げ回った。新聞は入学式や卒業式の総長の訓辞を第一面にのせた。しかし総長は首相から「曲学阿世の徒」とののしられた。

朝鮮戦争、神武景気と日本も豊かになってきた

頃、60年の安保闘争が起った。学生は皆デモに出かけて教室は空になった。テレビは国会議事堂の構内に突入するデモ隊を映し出した。学生達は機動隊にこっぴどくなぐられ、翌日頭に包帯を巻いて登校して来た。

高度成長の時代が続く、日本はますます豊かになって皆がふとってきた頃、今度は東大紛争が起った。学生達は狂気のように石を投げ合い、棒でなぐり合った。安田講堂はめちやくちゃにされ占拠された。大学の中の選択圧は急激に変わって行った。色々な先生方の御努力で何とか紛争もおさまり矢内原三原則は廃止する方向で停止した。

石油ショック以来低成長期に入ったが平和な大学が続いている。だがきっとまた何かが起ることだろう。イギリスの歴史家のことばだというのを思い出す。「the only thing man learns from history is that man learns nothing, from history」。しかしながら一つだけ一貫してきたことがありそうだ。それは世の中が右に動こうが左に動こうが大学は絶えず学生を守りつづけようとして来たことだ。この精神的によき時代の大学で人生の大半を過ごすことが出来て本当にしあわせだったと思っている。有難うございました。

生物学的古生物学の事始め

鎮西清高(地質)

花井哲郎先生がいよいよ御退官で、あのゆったりしたお体が教室を去られる時が近づきました。

花井先生は、日本における化石貝形虫(カイミジンコ)研究の創始者です。研究の始まりは一般に

探検的性格をもつものですが、先生の研究も、まずどこにどんな種類がいるかという調査、すなわち分類学から始まりました。先生一人で始まった研究も今では多くの弟子が参加して、分類や生態、生物地理、発生、殻構造、進化というようなさまざまな生物学的な問題に発展し、来年は日本で貝形虫の進化生物学を主テーマとする国際会議を開くまでになっております。

ここでは、このような先生のお仕事が始まった頃の話の一つを紹介して、先生をおくことばに代えたいと思います。先生が4年近いアメリカ留学をおえて帰国された、およそ30年近くも前の話です。当時の古生物学は、地層の時代判定や古環境復元を主なテーマとしておりました。しかし化石はもともと生物ですから、化石を生物学的に研究する視点があって当然です。花井先生は早くからこのことを強調した研究を進めていましたが、先生が留学当時、ちょうどアメリカでも同じ方向の研究が盛んになり、先生は帰国早々、張切ってこのような生物学的古生物学のセミナーを始められたわけです。

セミナーは私たち大学院生を中心に、先生方までまき込んで進められました。しかし当時セミナーで紹介した論文は、まだ意識のみ先走っている

たぐいのもが多く、学生からは不完全な化石でどうやって生物学的な研究をするか、などの疑問が出るし、先生方からは、これは古いものの単なる破壊だけで新しい体系が出ていないじゃないか、という意見がでて、セミナーは難航しました。花井先生は御自分がこれぞ進むべき道と思った方向を、先生方に“破壊だけではないか”と一言のもとに片付けられ、憤懣やる方ないけれども、それをじかに反論するわけにいかず（ここがいかにも温厚な花井先生らしいところです）、誰もいないと思ったトイレで、“チクショウ、チクショウ”と声を出してウップンばらしをしたそうです。ところが、誰もいないと思ったトイレに耳あり、なんと奥にはいついた人がいてこの声を聞いてしまい、皆に伝わってしまったのでした。

この時不評だった生物学的古生物学は、今ではその名の国際雑誌も出版され、日本でもこの立場に立つシンポジウムや総研が数多く行なわれるまでになりました。花井先生が種を播き、苦心して育ててこられた生物学的古生物学は、今では立派な若木に育っております。先生の帰国直後のチクショウ事件は、今ふりかえると、この分野における蘭学事始めのようなものだったなと思ひ当るのであります。

結晶学の流れの中の鉱物学第2講座

竹内慶夫（鉱物）

教授会メンバーに加えさせていただいてから30年近くになりますが、その間、鉱物学教室にとって記念すべき出来としてX線結晶学を分担する鉱物学第2講座の増設がありました。定永両一教授（現名誉教授、日本学士院会員）を始め諸先輩の御尽力によって昭和48年に実現されたこの新しい講座は、そもそも講座増が極めて困難な実情下で

の実現であったという点においても、その主宰者の責任は可成り重要であったと思います。

私の大学院時代も終りに近づいた1950年頃は、結晶の構造を決めること自身が非常に大変な仕事でした。今、振り返ってみると、それから不思議な程約10年のペースでX線結晶学が新しい発展を見せて来たことに気がきます。理論の発展を別に

すると、余り認識されていない様ですが、1950年代は回折強度測定自動化の一部が熱心に議論され、検討されていた期間でした。1960年代に入ると、これが花を咲かせ、単結晶自動回折計が普及しはじめ、やがて構造解析の自動化への発展の兆を見せて来ました。

自動回折計の進歩は、一方において回折強度測定の精度向上を伴っているため、1970年代に入ると、結合電子、d電子の密度分布が議論されるようになりました。鉱物学の分野で高温下、高圧下の構造研究が始められるようになったのもこの時代です。目下、精密構造解析の面では、高温における非調和熱振動の解析がホットな注目を浴びていると云っても良いでしょう。

ここで特筆したいことは、1970年代の当初には日本の結晶学者の間で、結晶学の将来計画が真剣に討議されていたことです。その結果、結晶学の発展のためには強力なX線源が必要であり、その為には電子軌道放射光の施設を持つことが最適との結論に達したわけです。やがて、日本学術会議内にその準備委員会が発足すると、反対論や、他の批判が耳に入るようになりました。然し、建設が始り、予定通り一昨年に光が出はじめましたが、現在その安定な稼働状況を見ていると、加速器技

術の素晴らしさは素人ながら恐嘆するばかりです。ここに申し上げたいのは、故西川正治先生のお弟子さん或いは孫弟子達がこの放射光施設建設推進の中心的な役割を果たしたことです。換言すれば、故西川先生が培われた日本の結晶学の伝統があって始めてそれが実現したと云っても過言ではないかも知れません。放射光の実現によって、結晶学は波長の制約から解放されるとともに、構造の動的状態の解析が可能になりました。このような巨大施設を生かすも殺すもユーザ次第という面もありますが、構造研究の分野に質的な発展が見られる準備が出来たことには変わりないと思います。

この様に、鉱物学第2講座創設以来の10年間は、結晶学の次の発展への準備期間でもありました。今、東大を去るに当って、その準備がととのったのを見とどけることが出来たのは私の幸であります。本来ならば、鉱物学第2講座の成果をより具体的にご報告する義務があると存じますが、また、表題に照らすと龍頭蛇尾に終る感がありますが、この小文にてご挨拶に代えさせていただきます。理学部の今後の一層のご発展を祈り、併せて今まで長年の御厚情に対し心から御礼申し上げる次第です。

竹内慶夫先生と鉱物学

武田 弘 (鉱物)

竹内先生は故東京大学名誉教授伊藤貞市先生の御指導のもとに鉱物の結晶構造解析の道に入られました。私が先生を存知上げるようになった時は、先生がアメリカから帰国された直後で、新進の講師として御活躍でした。昭和27年から昭和31年まで、当時の世界の結晶構造解析の中心であったペンシルバニア州立大ペンスキー教授、MITのバーガー教授のもとで過された御経験をもとに、

その頃発展しつつあったパタソン関数やX線の異常散乱を利用する構造解析の手法を駆使して、数々の複雑な結晶構造の解析を精力的にやっておられました。

特に先生の結晶構造に関する立体幾何学的な洞察力は鋭く、他者の追隨を許さぬもので、それまで決定困難であった構造をたちどころに解かれるということは度々でした。それもただ単に構造を

解くということだけでなく、その意味するところを見ぬかれ、結晶化学や構造原理などのストーリーをうまく語られるので結晶学的ロマンチストという評もある位です。

当時は原子配列の荒い骨組みの未決定なものが多く、現在のような精密構造解析はほど遠い時代でしたが、フィルム法を改良してゼイウンモの精密解析をすでにこの頃始められたのは、まさに時代を先取りするものでした。これがそれに続く造岩ケイ酸塩鉱物の単結晶自動回折計と高速電子計算機による結晶構造精密化の嵐を起す引き金ともなったお仕事でした。その後これらの精密化のための装置の導入に盡力され、現在の精密構造解析の発展の基礎をつくられました。

昭和34年に助教に昇進され、当時教授であった定永両一先生と共に、鉱物の多形、双晶、相転移の構造的原理についても新しい考えを導入され、最近のトロポケミカル双晶という概念に至る道を始められました。特にウンモの双晶の複合回折図形の解釈に関する理論は、その後の複雑なウンモポリタイプの発見と積層順序決定を可能にする基礎を与えました。昭和38年から昭和39年にかけてスイス国ベルン大学のノワッキー教授のところ、その頃未知構造の多い鉱物グループである硫塩鉱物の構造解析を手がけられ、多くの未知構造の決定をされただけでなく、その構造の系統化をなしとげられました。

日本産新鉱物の結晶構造決定も先生の手による

ものが多く、それも先の話にあったように、ただの構造決定だけでなく、新しい構造タイプや構造原理、結晶化学的解釈の面白いストーリーにまとめられたものでした。その結果先生の予言された未知の積層順序が、その後の高解像度電子顕微鏡による構造像により発見確認され、先生のお名前をとって、「竹内石」と命名されています。

昭和48年11月、鉱物学教室に新しく設置された鉱物学第二講座の初代教授および教室主任となられ、また日本結晶学会会長、日本鉱物学会会長などとして、公務に多忙な日々を過してこられました。一方研究面では、無機材料物質から地球深部・惑星物質までの幅広い無機化合物について、化学組成、温度圧力の変化による構造変化、相転移を扱われ、高温高压での構造変化決定を軌道にのせ、溶融点近くの1600℃付近、高压では100 kb以上の高压での構造精密化などを達成されました。

結晶学、鉱物学研連委員幹事として、また筑波の高エネルギー研につくられた放射光(SOR)利用施設については、その発案当時から関与され、実現に向けて多大の努力を傾けてこられました。誰が見ても退官されるようなお年には見えない若さを保っておられるので、後進のため先生の達成された多くの成果をもとに、鉱物の結晶構造原理について系統的にまとめられた結晶化学の本をお書きになられることをお願いして一文を終えたいと思います。

前川文夫先生を追憶して

古谷雅樹(植物)



前川先生は東大にまだ在職中から糖尿に悩まされておいでで、毎日毎日、一日も欠かさず御自分でインシュリンの注射をなさりながら、常人では出来ないような御活躍を長い年月にわたってなされていらっしゃいましたことは、まだ御記憶の方もあろうかと存じます。この糖尿病が原因で数年前に、丸善で本を御覧になっている折に、軽い脳血栓を生じて、突然会話が出来なくなり、さらに帰りの電車で片足が不自由になられたため、一ヶ月ほど慈恵医大の病院に入られておいででした。幸い最近では再び海外へ植物採集へ出かけられるほど回復され、周囲の者も一安心致しております。ところが昨年9月に山形県月山へ御家族と植物を見に行かれ大変楽しまれたそうですが、帰京された夜に腹痛をおこされて入院されました。爾来、ずっと療養を続けられましたが、結局1月13日に胃がんのため御亡りになりました。先生は明治41年のお生れでしたから、まだ75才で、本当に

残念な事で御座居ました。

前川先生は、旧制府立四中から第八高等学校を経て、昭和4年4月に東京帝国大学理学部植物学科へ入学されました。それ以来、昭和44年に停年で御退官なされます迄、四十年の長い期間を、この理学部で、学生、助手、講師、助教授、そして昭和31年以来教授(植物学第三講座担当)として過されました。また、昭和31年から3年間は、理学部附属植物園長に併任されました。

植物学を学ぶ者の中でも、前川先生ほど沢山の植物に深く接し、植物に情熱を注がれた方は希であると存じます。どのような契機で前川先生が植物学に志を立てられたのか、またいつ頃から植物に興味を抱かれたのか、御家族や前川先生と同じ世代の諸先輩におうかがい致しましたが、御答えは得られませんでした。前川先生に直接お尋ねする機会を永遠に失ってしまったことを、本当に残念に思います。八高時代には園芸部で活躍され、東大へ入学された頃には既に日本各地の天然記念物について深い造詣をお持ちであったと聞いておりますので、かなりお若い時代から次第に植物に対する関心を深められたのではないのでしょうか。

前川先生が理学部の学生であった頃は、まだ植物学教室は小石川植物園にありました。クラスメートの巨理俊次先生から承りますと、当時から先生は植物の形を丹念に黙々と、同じ資料を上から下から、そして右から左から、画に描かれていたのが、大変印象的であったという話でした。この精密で且、鋭い観察の蓄積が、前川先生の学問の出発点であったことは疑う余地がありません。先生の御研究は極めて多岐にわたっておられますが、それらはいづれも植物の形に基くものであり

ます。その御仕事の進め方は他に類をみない独自のものであり、それは御自身の眼を通した余人の追随し難い洞察力による観察に加えて、天賦の感性と詩人の魂から発する一種の「ひらめき」に依る理論であったと申せましょう。前川学説の特徴は、托葉起源論、古赤道分布論、ライフワークであった「ギボシの系統論」などいづれも考えて考えぬいた思考の深さにありましたが、そのような考えぬく習慣は、昭和14年から18年まで、本も資料も何一つ無い中支の戦場で銃を担ぎながら養ったものだ、と先生自ら語られたという事です。

前川先生は植物分類学者としての卓抜な知見に加えて、御父君の影響も受けて、漢字や民俗学についても深い造詣を御持ちになり、日本の植物名(和名)の考証に大きな業績を残されました。ま

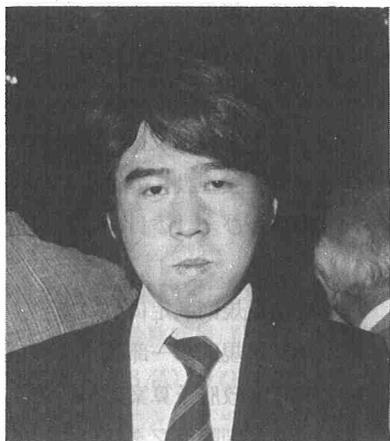
た、先生は自然の現象に非常に広い御関心をおもちでしたので、幾つもの構想が先生の中に平行して育っていたように見えます。このことと多少関係があるかも知れませんが、前川先生の門下生は現在随分広い様々な専門分野で活躍されておられます。

前川先生は大へん心のやさしい思いやりのある方でした。そして、今は死語になってしまいましたが、非常に親孝行な方であって、学生時代には病床の母君の療法に必要な食事分量を毎日測ってから登校なされたと言うことでした。

前川先生の思い出は、私共の心に盡きることなく浮んで参りますが、ここに先生の御遺徳をしのびつつ、謹んで御冥福を祈りたいと存じます。

高橋一郎さんを偲んで

田上 多佳子 (化学)



高橋一郎技官の突然の訃報に接したのは昭和59年1月3日早朝のことでした。

思えば昨年11月に身体の不調を訴えられ、11月24日に入院されてから41日目のことです。

折からの霧の中を御通夜の路に急ぐ途中、生前

のお元気な姿、そして入院前後の様子などが走馬燈のように目の前に浮んで来ました。

入院されてからは教室主任の高橋教授を始め理学部、化学の職員の方、他教室の親しい方々が度々小石川の東大分院へお見舞にゆき、頑張れ、頑張ってくださいと皆で励まして参りました丈に、その御訃報は余りにも空しく中々信じることが出来ませんでした。

高橋技官は昭和49年5月に化学教室に勤務され、その勤務の傍ら電機大学に通学し昭和55年に卒業しました。教室では電気担当者として教室内の電気設備の保守、管理をつとめておりました。その中でも老朽化した旧館の電気工事には随分苦勞したのではないかと思いますし、又、新館の建築に際しても本部及び理学部とのパイプ役となって細かいこと迄配慮して、黙々と仕事を進めておられました。

また水銀廃棄物の回収など、電気係以外の化学教室特有の業務にも携っておられました。

これらの仕事はすべて表に出ない、いわば裏方的なものでしたが、どんな仕事にもイヤな顔一つせずに笑顔で引き受けてくれた高橋さんは化学教室の日常業務をとどこおりになく行う上で貴重な存在でありました。

高橋さんはその童顔のためか又呼びやすいお名前のためか教官にも職員にも「一郎さん」と呼ばれ親しまれておりました。

ギターの名手で職員懇親会や送別会では一郎さんのギター伴奏で一段と会が盛り上がり全員大合唱と云う場面もしばしばでした。又、カメラマンとして活躍され、現在アルバムには高橋さんの写した写真が沢山残っております。

29歳の若さは何と伝っても無念の一言につきませんが、高橋さんを知る多くの人々の胸にその温い人柄がいつ迄も生きつづけてゆくことと思います。

最後に教室職員の小さな句会に投句された句を御紹介して、高橋一郎さんの御冥福を心からお祈りしたいと思います。

蟻 螂 の 庭 に 傾 く 網 戸 可 かな
水 の 色 静 かに 動 き 秋 の 湖
レ ー ス 編 む 若 き 人 の 手 想 い だ し
御 殿 山 球 追 い つ づ け 油 照 り
池 に 落 つ 夢 物 語 水 扉

《 学 部 消 息 》

教 授 会 メ モ

1月18日(水) 定例教授会

理学部化学教室本館5階講堂

議 題 (1) 前回議事録承認

(2) 人事異動等報告

(3) 人事委員会報告

(4) 教務委員会報告

(5) 学部長候補者の選出について

(6) 評議員の改選について

(7) そ の 他

(7) 会計委員会報告

(8) 教務委員会報告

(9) 企画委員会報告

(10) 中間子科学実験施設規程の一部改正について

(11) 中間子科学実験施設長の選出について

(12) 地殻化学実験施設長の選出について

(13) 人事委員及び会計委員の半数改選について

(14) 理学部防災規則制定について

(15) 植物園利用規則の一部改正について

(16) 昭和59年度政府予算案について

(17) 素粒子物理国際センターについて

(18) そ の 他

(次回予定：3月21日(水)13時30分より)

2月15日(水) 定例教授会

理学部4号館1320号室

議 題 (1) 前回議事録承認

(2) 人事異動等報告

(3) 理学部規則の一部改正について

(4) 転学部について

(5) 昭和59年度受託研究員の受入れについて

(6) 人事委員会報告

昭和59年度 理学部定例教授会予定日表

1. 開催日

開催年月日	曜日	時間
昭和59年4月18日	第3水曜日	午後1時30分より
5月16日	〃	〃
6月20日	〃	〃
7月18日	〃	〃
8月	休	会
9月12日	第2水曜日	午後1時30分より
10月17日	第3水曜日	〃
11月21日	〃	〃
12月19日	〃	〃
昭和60年1月16日	〃	〃
2月20日	〃	〃
3月20日	〃	〃

2. 開催場所

理学部4号館3階1320号室（物理学会議室）

理学部長と理職との交渉

学部長と理職との定例交渉は、12月19日及び1月23日に理学部会議室で行われた。主な内容は、以下のとおりである。

1. 職員の待遇改善問題について

理職は、今回教務職員（1名）の助手へ振替え、事務職員（3名）及び技術職員（1名）の昇格が実現したことに、当局の努力を多とし、更に、今後の努力を求めた。学部長は、今後も更に努力したいと述べた。

2. 定員外職員問題について

前回の交渉結果（理学部広報15巻5号）をふまえ、学部長は、教室からも定員化の要望があったので、再採用を求めながら、定員化の方向

で努力すると回答した。

3. 行（二）の調査について

12月に人事課が行った調査に対して、理職は、現在のポストは全員補充が必要であると主張した。学部長は、基本的には全員補充を希望していきたいと表明した。

4. 教職員の健康管理について

今春、若い職員が亡くなったことにかんがみ、理職は、教職員の健康管理及び保健センターのあり方等の諸問題について、具体例を交えつつ、学部長にその改善を要望した。学部長は、「関係機関に要望を伝え、また、健康管理の改善についても考えたい。」と回答した。

5. 軍事研究問題について
 学部長は、『軍事研究は行わない』という
 確認書の内容は本学の基本方針であり、このこ

とについては教授会でも説明した。また、理学
 部広報にも掲載したい。」と述べた。

人 事 異 動 報 告

(助 手)

所属	官 職	氏 名	発令年月日	異動内容	備 考
地 理	助 手	浜 野 洋 三	59. 1. 1	昇 任	東大震研助教授へ
物 理	助 手	豊 島 近	59. 1. 16	採 用	

(講師以上)

物 理	講 師	高 橋 令 幸	59. 1. 31	辞 職	住友重機KKへ
-----	-----	---------	-----------	-----	---------

(職 員)

事 務	給与掛主任	鈴 木 雪 子	59. 12. 31	勸奨退職	
物 理	技 官	吉 川 博 介	58. 12. 31	辞 職	
地 質	教務職員	市 川 健 雄	59. 1. 1	昇 任	地質助手へ
化 学	技 官	高 橋 一 郎	59. 1. 3	死 亡	
情 報	技 官	池 田 俊 春	59. 1. 31	辞 職	
情 報	技 官	佐 藤 安 紀	59. 2. 16	採 用	

理 学 博 士 の 学 位 授 与 者

〔昭和58年 4 月 25 日付理学博士の学位授与者 (2 名) 〕

専門課程	氏 名	論 文 題 目
論 文 博 士	佐 野 有 司	日本列島におけるヘリウム同位体比の分布と地質構造との関係
同	福 原 真 二	ホモロジー・レンズ空間の或る不変量について

〔昭和58年 5 月 23 日付理学博士の学位授与者 (5 名) 〕

論 文 博 士	北 川 円	大腸菌のリボゾームタンパク質に関する遺伝学的研究
相 関 理 化 学	相 原 正 博	連続発情および連続非発情動物の子宮におけるエストロジェン受容機構

専門課程	氏名	論文題目
生物化学	越尾 修	転写活性なクロマチンにおけるヒストン分子のアセチル化機構
論文博士	可知 直毅	海岸砂丘におけるオオマツヨイグサの個体群動態と生活史戦略
同	秋山 伸一	飛弾変成帯の地質構造と神岡を中心とする鉛・亜鉛鉱床の鉱化作用について

〔昭和58年6月27日付理学博士の学位授与者（9名）〕

論文博士	大門 寛	中間エネルギー領域での電子の弾性散乱についての実験的および理論的研究ならびにシンクロトン放射を用いた光電子分光法による半導体表面での反応の研究
同	住 篤子	自縄自縛過程における励起子の共鳴2次光学スペクトルに関する理論的研究
同	曾根 純一	超伝導微粒子の核磁気共鳴の研究
同	邑田 仁	日本産テンナンショウ属（サトイモ科）の分類学的研究
同	佐野 茂	$GL(n, C) / GL(n, R)$ 上の不変帯球超関数とフーリエ逆変換公式
同	坂牧 俊夫	異常散乱因子の測定と位相決定への応用
同	水谷 明	逆 Sturm-Liouville 問題について
同	大島 治	榛名火山の地質・岩石・鉱物学的研究
同	宮島 英紀	アモルファス相希土類鉄合金薄膜の磁氣的性質

〔昭和58年7月18日付理学博士の学位授与者（8名）〕

論文博士	原田 平	低原子価スズを用いる選択的合成反応の研究
同	曾田 邦嗣	溶液中にある自然状態DNAの動的散乱特性
同	岡本 博司	固体電解質濃淡電池を用いた白金上のCO酸化反応の研究
同	千原 貞次	吸着剤を用いた有機化学反応
同	林 繁信	NMRによる金属水素化物の研究
同	門田 裕一	本州・四国・九州産トリカブト属トリカブト亜属植物（キンボウゲ科）の分類学的研究
同	加瀬 友喜	本邦前期白亜紀海生及び汽水の腹足類
同	上田 芳文	レーザーシュタルク分光学—— $^{14}\text{NH}_3 \nu_2$ 基本帯における一事例研究

〔昭和58年9月26日付理学博士の学位授与者（11名）〕

論文博士	大西 弘	スピン1および3/2の粒子の弾性散乱における偏極量とスピン依存力との関係
------	------	--------------------------------------

専門課程	氏名	論文題目
植 物 学	津 田 雅 孝	水銀トランスポゾン <u>Tn 501</u> を用いた緑膿菌の遺伝解析
論 文 博 士	先 砥 庸 治	ピロリジン誘導体を用いるアルデヒドの不斉合成および光学活性天然有機化合物の合成の研究
物 理 学	崎 山 雅 行	有限領域内における二次元偶糸群の平衡状態
論 文 博 士	山 本 明	大強度低エネルギー K 中間子ビームに関する研究
同	林 育 夫	セイヨウトコブシ <i>Haliotis tuberculata</i> の繁殖生態
同	太 田 秀	深海カメラによる駿河湾の漸深海帯における大型底生生物の定量と観察並びにサクラエビの垂直分布の観察
同	中 西 和 郎	有機硫黄およびセレン化合物における分子内相互作用：化学的および分光学的研究
同	黄 栄 輝	大気中において地形と定常的な熱源によって励起される定常プラネタリー波とその伝播
同	小 川 桂一郎	銀 (I) 塩存在下におけるベルオキソ二硫酸塩による環式第二アミンの酸化と生成物の立体配座解析
同	柳 澤 正 久	MAGSAT データから地殻磁気異常を求める方法

〔 昭和58年 10月 24日付理学博士の学位授与者 (4名) 〕

論 文 博 士	小 安 重 夫	コーロバクターの細胞分裂・細胞周期に伴う形態成とペニシリン結合蛋白質
同	加 藤 信 一	アフィン・ワイル群の Kazhdan-Lusztig 多項式について
同	加須栄 篤	ラプラシアン及びヘッシアンの比較定理の応用
同	佐 藤 文 廣	概均質ベクトル空間に付随する多変数ゼータ関数

〔 昭和 58年 11月 21日付理学博士の学位授与者 (7名) 〕

論 文 博 士	篠 原 正 雄	星間電離水素領域における水素原子の準位滞在数
同	小 山 晃 一	Na 蒸気を降らせた SO ₂ の霜の反射 Spectra-I ₀ の表面物質の解明—
同	若 山 信 子	有機分子性結晶の物性
同	朝 倉 弘 修	海水トウゴウヤブカ <i>Aedes togoi</i> Theobald 幼虫の浸透圧調節に関する研究
数 学	清 田 正 夫	位数 9 の基本可換ディフェクト群をもつ 3-ブロックについて
論 文 博 士	伊 達 二 郎	秋田県深沢黒鉱鉱床周辺の変質に関する研究
同	野 原 昌 人	太平洋地域マンガノジュールと随伴堆積の地球化学研究

〔昭和58年12月19日付理学博士の学位授与者（9名）〕

専門課程	氏名	論文題目
物理学	甲斐直行	深非弾性散乱及び陽子—反陽子衝突における大質量軽粒子対の時間反転奇の非対称性
論文博士	肥後健一	細胞のリボソームタンパク質の分子進化に関する生化学的研究
物理学	伊藤敦	真空紫外線の酵母細胞に対する作用の研究
地球物理学	藤部文昭	関東地方の海陸風に関する研究
論文博士	秋山孝子	梅雨前線の構造と維持についての観測的研究
同	谷川清隆	制限三体問題における逆行衛星捕獲の不可能性
同	徳山英一	北フィリピン海の四国海盆と大東海嶺域の海洋地質と海底地殻構造
同	藤岡換太郎	日本海溝域の火山性堆積物と東北日本孤新第三紀噴火活動
同	水野浩雄	地磁気永年変化の変動にみられる間欠性と、急速な変動の時常数

〔昭和59年1月23日付理学博士の学位授与者（5名）〕

人類学	徳永勝士	日本人における補体系成分 C ₂ , C ₄ , C ₆ および B F の遺伝的多型現象に関する研究
物理学	片岡良一	二価陽イオンと筋小胞体の相互作用
論文博士	井上雅夫	相模湾の堆積物中に含まれる海綿骨片の供給過程の研究
同	中川憲夫	超対称性のある素粒子模型と径数に対する制限
同	枅田幹也	コホモロジー複素射影空間上のトラス作用の整ウェイト系

海外渡航者

(1 月)

所属	官職	氏名	渡航先国	渡航期間	渡航目的
化学	助教授	奈良坂 紘一	アメリカ合衆国 ジャマイカ	1. 1～1.13	モナシンプジウム出席及び有機合成化学に関する研究打ち合わせのため
物理	助教授	堀田 凱樹	アメリカ合衆国	1. 8～1.15	日米科学協力事業セミナー「視興奮の分子機構」に出席のため
物理	助手	白木原 康雄	連合王国	59. 1.5～61. 1.6	生物物理学に関する研究のため
物理	助教授	江口 徹	インド	1. 3～1.24	高エネルギー物理学理論に関する調査・研究のため

所属	官職	氏名	渡航先国	渡航期間	渡航目的
物理	教授	小柴昌俊	アメリカ合衆国	1. 3 ~ 1. 21	素粒子物理学に関する研究及び I C O B A N 1984 会議出席のため
情報	教授	國井利泰	アメリカ合衆国	1. 6 ~ 1. 12	I E E E (米国電気電子学会) コンピュータグラフィックス & アプリケーションズの編集会議に出席、及びテキサス大学で研究討論をするため
物理	教授	有馬朗人	イスラエル	1. 6 ~ 1. 23	“高いスピンを持つ核準位の電磁的性質”の研究会出席のため
植物園	教授	岩槻邦男	マレーシア	1. 8 ~ 1. 16	マレーシア国における学術の現状調査のため
物理	助教授	小林孝嘉	アメリカ合衆国	1. 9 ~ 1. 16	日米科学協力事業セミナー「視興奮の分子機構」に出席のため
数学	助手	小澤真	アメリカ合衆国	1. 12 ~ 6. 25	ランダム媒質の数理の研究のため
情報	教授	山田尚勇	アメリカ合衆国	1. 11 ~ 4. 22	情報科学及び人工知能の研究に関する協議連絡のため
物理	助教授	永宮正治	アメリカ合衆国	1. 15 ~ 1. 23	ベバラックにおける高エネルギー重イオン反応の共同実験のため
地質	教授	久城育夫	オーストラリア	1. 22 ~ 1. 29	高圧・高温地球化学国際研究集会出席のため
物理	教授	宮本健郎	オーストリア	1. 14 ~ 1. 29	I N T O R 作業会議出席のため
遺伝子 実験施設	講師	米田好文	アメリカ合衆国	1. 28 ~ 3. 11	米国における組換え遺伝子実験の研究状況調査及び共同研究打ち合せのため
地物研	助教授	国分征	アメリカ合衆国	1. 29 ~ 2. 10	O P E N ・科学ワーキンググループ会合出席並びに協同実験予定者との打ち合せのため

(2 月)

地質	助手	伊藤谷生	ニュージーランド	2. 5 ~ 3. 6	「大平洋地域の第四紀地域変動に関する国際シンポジウム」への出席と巡検への参加のため
化学	助手	小杉信博	連合王国	2. 2 ~ 3. 16	分子計算化学におけるスーパーコンピュータ利用の研究のため
地質	教授	飯山敏道	フランス	2. 21 ~ 3. 5	深海底高精度観測に関する調査研究のため
素粒子	助教授	戸塚洋二	ドイツ連邦共和国	2. 22 ~ 3. 17	国際協同実験電子・陽電子衝突実験のため
物理	教授	猪木慶治	フランス	2. 26 ~ 3. 21	第19回モリオンド会議出席及び高エネルギー物理学に関する研究連絡のため
素粒子	助手	佐藤朝男	ドイツ連邦共和国	2. 26 ~ 3. 21	国際協同実験電子・陽電子衝突実験のため
物理	助教授	釜江常好	アメリカ合衆国	2. 24 ~ 3. 17	日米科学技術協力事業「電子・陽電子衝突型加速器による新粒子検出実験」に参加のため

所属	官職	氏名	渡航先国	渡航期間	渡航目的
化学	教授	田 隅 三 生	連 合 王 国	2.25 ~ 3. 3	国際共同研究「電導性高分子および生体高分子の中性子散乱による研究」実施のため
数 学	助 手	真 島 秀 行	フ ラ ン ス	2.28 ~ 3.27	微分方程式の特異点の研究連絡のため
化学	教授	朽 津 耕 三	ア メ リ カ 合 衆 国	2.25 ~ 3.18	第10回「分子構造」オースチンシンポジウム出席及び物理化学研究打ち合せのため

編 集 後 記

今号は恒例に従い、停年ご退官の先生方の記事、を中心に編集しました。これにて、私も編集担当の任務を終え、いささかほっとしております。随分と無理なお願いもしましたが、快く原稿をお書きいただいた方々に厚く御礼申し上げます(尾本)。

 ◎泥棒がねらっている (盗難注意) !

本郷構内は泥棒天国といわれています。いたるところで泥棒 (盗難) の被害にあっています。あなたのちょっとした注意で被害をくいとめられます。

～最近被害続出～

あなたです!

火事を出すのも

防ぐのも

編集:

矢崎 紘一 (物理)	内線	4123
松野 太郎 (地物)		4299
露木 孝彦 (化学)		4357
田賀井 篤平 (鉱物)		4544
尾本 恵市 (人類)		4482
